

# 人を思う心 ふるさとを思う心

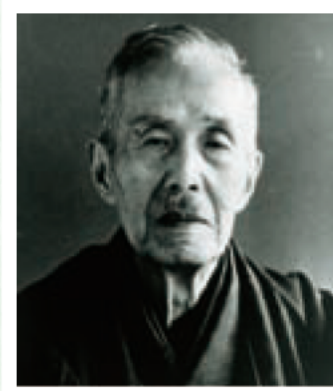
## さ さ き のぶつな 佐佐木信綱

鈴鹿市石薬師町出身の歌人・国文学者で、万葉集・古典文学の研究や註釈、復刻にも力を尽くした人物が佐佐木信綱です。苗字の「佐佐木」は、中国で名刺を作った時に、印刷の字に本来の「々」が無かったことによるもので、以後好んで使うようになったといわれています。

1872（明治5）年、歌人佐々木弘綱の長男として生まれた信綱は、父の教えを受け5歳から作歌を始め、帝国大学文学部を卒業後、和歌の実作と研究を生涯の目標とし、万葉古写本の発見複製、『校本万葉集』の編集などに大きな功績を残しました。主な著書に『日本歌学全書』『和歌史の研究』『万葉集事典』や、自ら主宰した竹柏会の機関誌『心の花』や歌集『思草』『新月』などがあります。

また、門下生からも有名な歌人が出るなど、東京大学でも26年間にわたり歌学史などを教えました。1934（昭和9）年帝国学士院会員に、1937（昭和12）年には文化勲章を受章し、帝国芸術院会員となりました。

現在、生家は隣接する佐佐木信綱資料館と併せて、佐佐木信綱記念館となっています。



佐佐木信綱



佐佐木信綱資料館（鈴鹿市提供）

## 学習のめあて

佐佐木信綱は、28歳という若さで竹柏会という短歌の会を興して機関誌『心の花』を創刊し、和歌の世界の裾野を広げた人物です。また、万葉集の時代から現代にいたる和歌の歴史についての研究者としても知られています。

信綱は生涯を通して数多くの歌を残しています。著名な歌人を含む、多くの門人を育てた信綱の人は、次のような信綱の作品からもしのばれます。

「願はくは われ春風に 身をなして 憂ひある人の 門を訪はばや」  
「白雲は 空に浮かべり 谷川の 石みな石の おのづからなる」

また、信綱は、北海道から九州に至る日本中の校歌の作詞を手がけました。三重県の学校でも、多くの校歌を残しています。

信綱の残した歌やエピソードから、ふるさとを思い、感謝する気持ちを持ち続けた信綱の生き方について考えてみましょう。

## 考えてみよう

- 1 佐佐木信綱は、どのような仕事を行ったのでしょうか。
  - 2 佐佐木信綱は、どのような人がらだったのでしょうか。上の「願はくは…」、「白雲は…」の2つの歌に込められた気持ちや願いをもとに話し合ってみましょう。
  - 3 佐佐木信綱は、どのような思いを込めて三重県の学校の校歌をつくったのでしょうか。
  - 4 ふるさとを思い、感謝する気持ちを持ち続けた佐佐木信綱の生き方について、どのように思いましたか。話し合ってみましょう。
  - 5 自分たちの住む地域で、文学や芸術の分野で活躍した人物について調べてみましょう。
- ☆ 第1部の「見つめよう わたしたちのふるさと そしてこの国（P104～107）」を活用し、ふるさとのよさについて話し合い、ふるさとの紹介文を考えてみましょう。



## 「私は春風になろう」

そう強く願った28歳の男の人がいました。佐佐木信綱です。1896(明治29)年、竹柏会という短歌の会をスタートさせました。

その第1回大会は1899(明治32)年4月6日、場所は東京日本橋の会場です。信綱は180名を上まわる人々の前で、静かに、けれど自信に満ちた顔で、出発の歌を詠み上げました。



第1回竹柏会で歌を詠む信綱を描いた絵

願はくは われ春風に 身をなして  
憂ある人の 門を訪はばや

《願いがかなうなら、私は暖かく野を吹く春風になりたい。そして悩みや心配ごとを持っている人々を訪ねては、慰めたり励ましたりしてあげたい》という歌です。

信綱は、歌を詠みながら、ふるさとの山や川、今は亡き父のことを思い出していました。懐かしさと感謝の気持ちで、胸がいっぱいになりました。

日本語 いく千万の 中にして  
なつかしきかも 「ふるさと」といふは

《いく千万もある日本語の中で「ふるさと」という言葉ほど、私の心にひびいてくるものはない。》という歌です。

ふるさとの 鈴鹿の嶺 呂の 秋の雲  
あふぎつつ思ふ 父とありし日を

《ふるさとの鈴鹿の山の頂に秋の雲がかかっている。今ここからじっと仰ぎ見てみると、心にじんときくるものがある。それは幼いとき父に教わった日々である。》という歌です。

信綱の歌は「春風」のように人の心を慰め、励ますものでした。

信綱は書いています。

「歌は、心の花である。花なき園はさびしい。歌なき人生はさびしい。」

また、歌を作る心構えとして「ひろく、ふかく、おのがじしに」という言葉をかかげました。

歌にする題材を「ひろく」目を開いて求め、それを「ふかく」見つめ、そして他人のまねでなく、自分自身の歌を作りなさい、ということではないでしょうか。



信綱が歌を作る心構えとした「ひろく、ふかく、おのがじしに」

湯の山には、次のような歌碑があります。

白雲は 空に浮かべり 谷川の  
石みな石の おのづからなる

《白い雲は、ゆったり浮かんでいる。谷川にある、石、石、石、それぞれはみなそれぞれの姿をしている。》という歌です。